

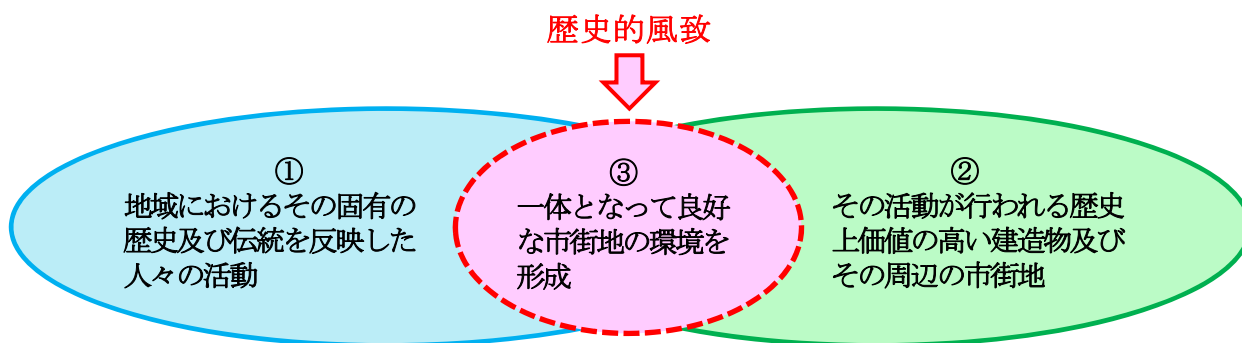
第2章 大館市の維持向上すべき歴史的風致

○大館市の維持向上すべき歴史的風致

大館市には、米代川とその支流の流域に広がる豊かな自然環境の中でつくられてきた歴史と文化があり、先人から受け継いだ活動や歴史的資産が数多く残っている。

「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地環境」と定義されている。そのため、下記の①から③の要素をすべて備えていることが、歴史的風致となり得ることとなる。

- ① 大館市固有の歴史や伝統を反映した活動が、現在も行われていること
- ② ①の活動が歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地で行われていること
- ③ ①の活動と②の建造物が一体となって良好な市街地の環境を形成していること



歴史まちづくり法に基づく上記の条件を考慮し、大館市における維持向上すべき歴史的風致として次の六つを選定した。

- ① おおだてじょうか まちわ 大館城下の町割りに残る歴史的風致
- ② おうぎたしんめいしゃ 扇田神明社をめぐる歴史的風致
- ③ たしろだけ さくうらな 田代岳の作占いに見る歴史的風致
- ④ あきたいぬ 天然記念物「秋田犬」を守り育てる歴史的風致
- ⑤ ほうおうざん 鳳凰山周辺に見る歴史的風致
- ⑥ あさり とっこ 浅利氏ゆかりの独鈷の歴史的風致

それぞれの歴史的風致は次頁以降で述べていく。

おおだてじょうか まちわ
1. 大館城下の町割りに残る歴史的風致

かつての城下町であった大館の中心部には、秋の「大館神明社例祭」と、冬の「大館アメッコ市」がふるさとの祭りとして受け継がれている。その起源は、大館城の周辺に開かれた「市」に源流があり、城下町に配置された町人町に花開いた商業文化とともに育まれ、現代に伝えられてきた。

16世紀初めの大館地方は、浅利氏が十狐城を拠点に数多くの城館を配置して治めていた。大館城は16世紀後半に浅利勝頼が築城したとされているが、この頃は、浅利氏、安東氏、南部氏、秋田氏などの勢力が拮抗し、大館城の支配者は激しく入れ替わっていた。この頃の城下が開かれた「市」が大館の商業の起源と語り伝えられている。

やがて17世紀に入ると、佐竹氏とともに国替えで秋田入りした小場義成が、大館城の城代となり、のちに佐竹西家を名乗ることを許され、260年間この地を治めた。この間に形成された城下町が、その後の大館市の礎となり、地形や地名が現在も受け継がれている。



大館城本丸跡(桂城公園)北側からの眺望

(1) 大館城下の町割り

①大館城代を務めた佐竹西家

大館城の初代城代小場義成は、常陸佐竹氏の一族で、慶長5年(1600)まで茨城県常陸大宮市に所在する小場城の城主であった。義成は慶長7年(1602)に佐竹義宣の国替えに伴い、ほかの家臣とともに秋田入りした。小場義成は、浅利氏の残存勢力を抑えるとともに、津軽・南部両国境の備えを固めるため、慶長13年(1608)大館城に入城した。慶長15年(1610)、正式に大館城代となった小場義成は、さっそく城郭の改修と拡張を行い、同時に町割りにも着手した。

元和元年(1615)幕府の一国一城令が発令されたが、秋田藩では、大館城と横手城は久保田城の支城という名目で幕府から残置が容認された。

その後徐々に地盤を固めた小場氏は、万治年間(1658~1660)に「佐竹」を名乗ることを許され、のちに「佐竹西家」と呼ばれるようになり、大館佐竹氏は、第11代義遵まで約260年間、大館城代を務めた。

②昔と変わらない大館城周辺の地形

大館城跡は、大館盆地の中央部に舌状に突き出た段丘上よねしろにあり、米代川支流の長木川左岸に位置する。城跡を中心に東の大館八幡神社から、西の愛宕神社あたごに至る北側は崖状の急斜面をなし、北側うしゅう(羽州街道が津軽に続く方面)が一望できる環境にある。つまり、矢立峠を越えて来る津軽方面の敵、米代川下流方面からの敵の動向を遠方から察知できる環境にあるのが大館城の位置である。

大館八幡神社から愛宕神社まで続く崖状の地形は、今もほとんど変わらない形で残されている。それは、享保 13 年(1728)の城下絵図、昭和 23 年(1948)と平成 28 年(2016)の航空写真を見比べて確認することができる。

最初に大館城を築いたのは浅利勝頼で、16 世紀後半(大館戊辰戦史)のこととされている。その後 17 世紀に入り、大館城代となった小場義成によって新たな城郭が整備されたが、幾度かの火災もあり、最後は明治元年(1868)戊辰戦争の際に大館佐竹氏第 11 代義遵が自ら火を放ち落城した。

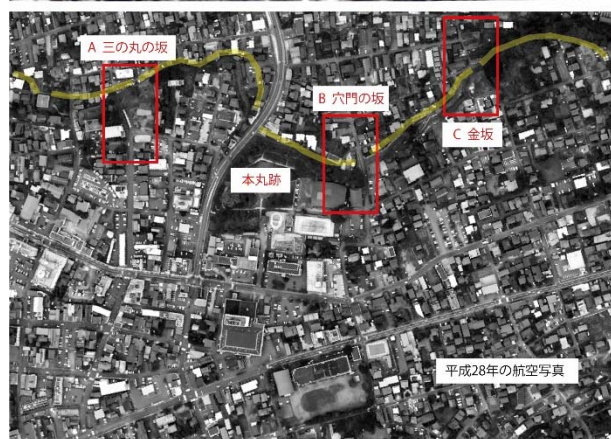
本丸跡には、明治 35 年(1902)に高等けいじょう小学校が開校し、のちに桂城小学校の敷地として昭和 29 年(1954) 3 月まで活用された。昭和 31 年(1956)には桂城公園として供用を開始し、これ以降、本格的に整備が進んだが、大館城の内堀と土塁の一部が残る公園は、四季折々の風景を楽しめる市民の憩いの場となっている。



本丸に近い武道館隣の坂道(通称：穴門の坂)



昭和23年の航空写真



平成28年の航空写真

大館城跡周辺の航空写真
(上は昭和 23 年、下は平成 28 年撮影)

③今に残る城下町の道と地名

城下町の構成は、大館城の本丸を中心として、その周囲に内町^{うちまち}とも呼ばれる侍町が配置され、さらにその外側には、外町^{とまち}とも呼ばれる町人町が配置された。

また、神社やお寺も城下町を構成する大事な要素として配置されている。

58 頁の城下絵図と現在の地図を重ね合わせた城下復元図を見ると、特徴的な地形や城下町特有の鉤型の道、配置された寺社の位置、侍町や町人町の名前などが地名として今も残っていることがわかる。

○今も残る城下町の「道」

本丸周辺には城下町特有の細い道、鉤型の道が随所に残っており、特に本丸の東側、大館八幡神社に向かう方面には昔のままの道が数多く残っている。

また、特徴的な崖状の地形に残る3カ所の坂道(58 頁の城下町復元図に示している、A三ノ丸の坂、B穴門の坂、C金坂)は、本丸や侍屋敷のある台地の上の町と、足軽や百姓が住まいする下の町を結んでいた道である。

今でも台地の上に「上町」、台地の下に「下町」の通称があり、この道は生活道路として使われている。上町・金坂町・新金坂町周辺の道や、金坂から大館八幡神社に向かう道、赤館町、部垂町、桜町などの道も絵図の頃からの道である。

○侍町の地名

侍町には、秋田藩から派遣された侍と、大館城代の家中が、それぞれの別の町内に配置され居住したという。特徴的なのは常陸から移ってきた佐竹氏由来の家臣団が居住した町内で、「部垂町」は、常陸大宮市に所在した部垂城の家臣たちが、主を失って小場家の寄騎となり大館城下に居住した所である。部垂衆と呼ばれ、町内にかつての君主を祀った部垂八幡神社を建立した。

また、「長倉町」は、常陸大宮市に長倉城を築いた長倉義興の家臣たちが長倉衆と呼ばれ、大館城下に居住した所である。長倉義尚の二男、上平義景家が常陸時代から祀っていた御神像が、現在の大館神明社の御神体として合祀されたと伝えられている。

「赤館町」も赤館衆と呼ばれた赤館城の家臣たちが、小場家寄騎となり居住した所である。このほかに、「三ノ丸」、「向町」、「谷地町」、「桜町」、「金坂」、「片町」などが侍町の地名として現在も残っている。

○町人町の地名

町人町は、商人や職人、百姓屋敷を配置したところである。中でも「大町」は、町割りを行う際に、百姓を移転させ、多くの商人たちが居住する町として誕生した。このあたりには、商人が店舗を構え、「市」が頻繁に開かれるようになり、上方や中国地方からの商人も出店して大

いに賑わうようになる。やがて、「中町」^{ぼくろ}、「馬喰町」^{ぼくろ}、「新町」^{ぼくろ}を合わせた外町4町は商業活動の中心地として繁栄し、県内でも有数の商業地へと発展してきたのである。

また、外町4町は、現大館神明社を氏子として当初から支えてきた町内で、大豊講^{たいほう}(大町)、中和講^{ちゅうわ}(中町)、馬龍講^{ばりゅう}(馬喰町)、新連講^{しんれん}(新町)の奉納講は、古くから続いている。「田町」、「川原町」、「古川町」などは百姓屋敷が配置された町内で、これら町人町の多くは、地名として今も残っている。

○城下町時代からの寺社

城下町の東に配置されている「大館八幡神社」(重要文化財)は、大館城内に祀っていたものを貞享4年(1687)現在地に遷したものである。西には産土^{うぶすな}を祀る神社として「大館神明社」が配置された。

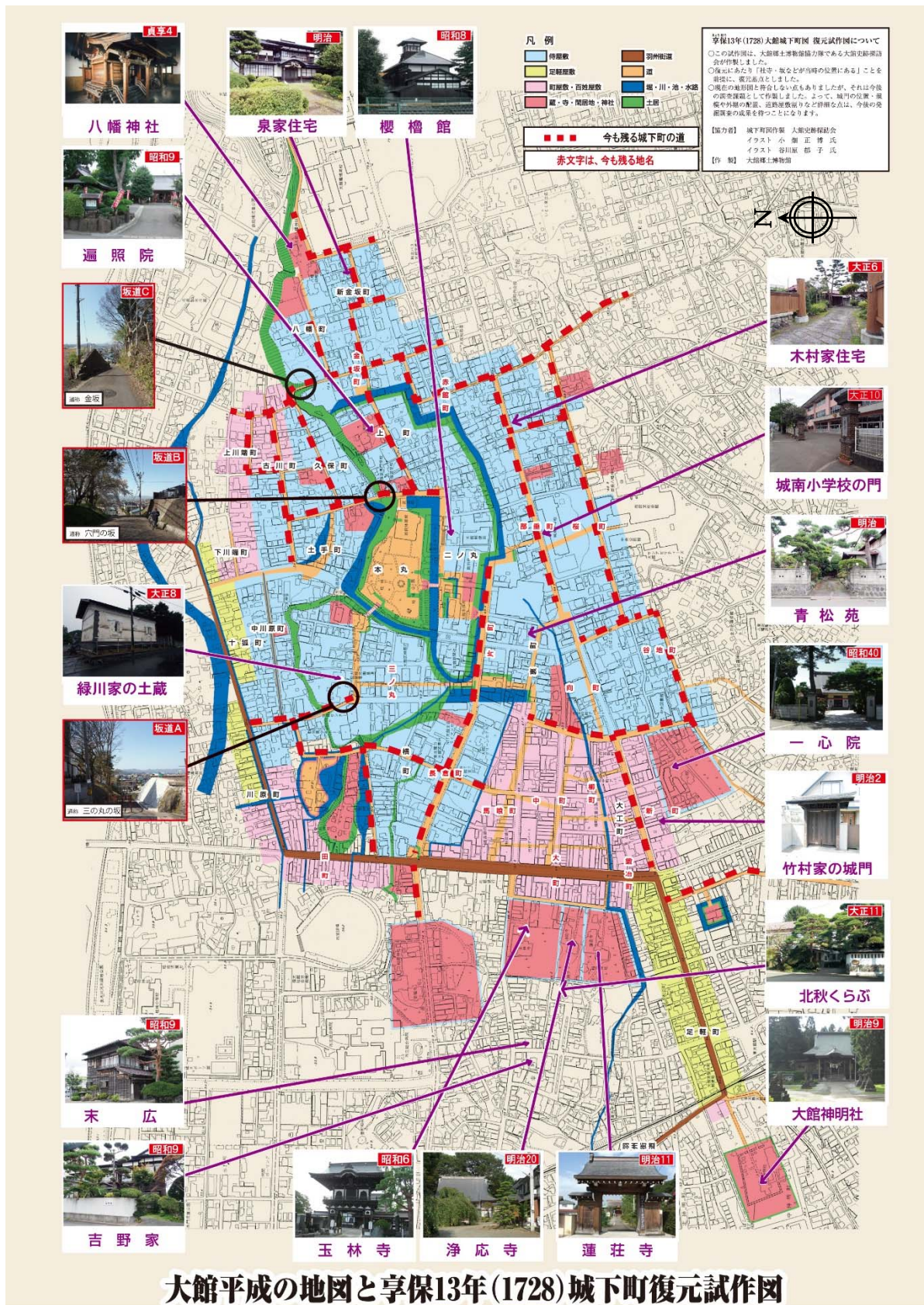
「愛宕神社」^{あたご}、「部垂八幡神社」^{へだれ}、「一心院」^{いっしんいん}、「遍照院」^{へんじょういん}、「宗福寺」^{そうふくじ}、「蓮荘寺」^{れんしょうじ}などは、大館佐竹氏に由来する寺社で、侍町に配置された家臣団同様に常陸との縁が深い。浅利の時代から続く大館最古の寺院である「玉林寺」^{ぎょくりんじ}、大館城開城^{じょうおうじ}に由来する「浄心寺」も城下町に組み入れられている。これらの寺社は、当時と同じ配置にあり、城下町の痕跡を色濃く残している。



大館八幡神社(貞享4年)



遍照院(昭和9年再建)



大館平成の地図と享保13年(1728)城下町復元試作図

城下復元図 この城下町復元試作図は、享保13年(1728)の城下絵図と現在の地図を重ね合わせたもので、小場義成が大館城の城代となって最初に着手した町割りから400年を経た平成22年(2010)に作成されたものに今も残る建造物や地名などを表示したものである。

(2) 大館神明社例祭

大館神明社の例祭は、大町通りを中心に毎年9月10日(宵祭り)、11日(本祭り)の二日間にわたって執り行われる本市の代表的な秋祭りである。

例祭は、古くから続く大館神明社の御神輿巡行と、露店ひしめく通りを重さ1トンを超える各講自慢の山車を曳き、その勇壮さを競い合うのが特徴であり、山車の上で披露される「大館囃子」が各講に共通した伝統芸能として継承されている。

大館神明社は、かつて小場義成が行った城下町割りの西端に位置し、参道からまっすぐ東に続く羽州街道は、祭りの中心となる大町通りから北方向に折れ、津軽方向へと続く。

①大館神明社の起源

旧記によると、もともとは小館花道上にある古神明社がふるしんめいしや大館・こだてほな うぶすな小館花の産土神であったとされている。佐竹義宣が秋田藩主となって70年余り後の延宝3年(1675)に大館神明社は現在地に移され(大館戊辰戦史付沿革史)、この際に佐竹氏を先祖に持つ長倉義尚の二男上平義景家が、常陸時代から祀っていた御神像を神明社御神体として奉鎮座したとある。この時に古神明社の祭神と合祀して始まったのが、現大館神明社の起源と考えられている。



大館神明社(明治9年再建)



御神輿(明治7年建造)

大館神明社は、その後に何度か再建されたが、明治3年(1870)9月の大火で(御神輿とともに)類焼し、現在の社殿が完成したのは明治9年(1876)秋のことであった。再建事業録(明治38年(1905))によれば、全郷から四千円余の献納金を得て明治8年(1875)に工事を起こし、翌年秋に完工をみたとある。当時の米価は一石(150kg)三円五十銭ほどなので、四千円がいかに大きな額かがわかる。なお、現行の御神輿は、明治5年(1872)から3年間、全氏子が毎月五厘ずつ奉納して明治7年(1874)に建造したものである。

②御神輿巡行区域内に残る建造物

大館神明社の御神輿は、最初の氏子町内であった外町4町から始まり、広い氏子町内の会所をくまなく巡行する。この区域内には、合祀した御神体^{かいま}に由来する古神明社、かつて賑わった新開地に残る料亭などがある。また、大館駅前には昭和30年代の映画館や近代和風の建造物が残っており、近現代大館の足跡を垣間見ることができる。



古神明社(昭和16年再建)

以前の社殿が昭和15年(1940)に焼失し、その翌年7月末に再建された。石造の鳥居は明治41年(1908)に建立されたものである。



北秋くらぶ(大正11年)

かつて賑わった新開地に残る料亭。建物の一部は大正11年(1922)に再建されたものである。



割烹末広(昭和9年)

かつて賑わった新開地に残る料亭。火災に遭い、昭和9年(1934)に再建された。



料亭吉野家(昭和9年)

かつて賑わった新開地に残る料亭。火災に遭い、昭和9年(1934)に再建された。



緑川家住宅(昭和 33 年)

製材業や金融など、多くの分野で活躍した緑川大二郎氏の邸宅。駅前に残る近代和風の建造物。



映画館オナリ座(昭和 30 年)

洋画専門の映画館として大館駅前にオープンし、一世を風靡したが平成 16 年(2004)に閉館。平成 26 年(2014)に再開して現在に至る。



木村家住宅(大正 6 年)

台湾などで活躍した木村泰治氏が建造した住宅。後年、母屋は暮らしやすいように改造されているが、離れは、昔のまま保存されている。



城南小学校の門(大正 10 年)

元は大正 2 年(1913)に開設した、「町立大館実科高等女学校」の門で、大正 12 年(1923)には大館高等女学校に昇格し、大館桂高校の前身となった。



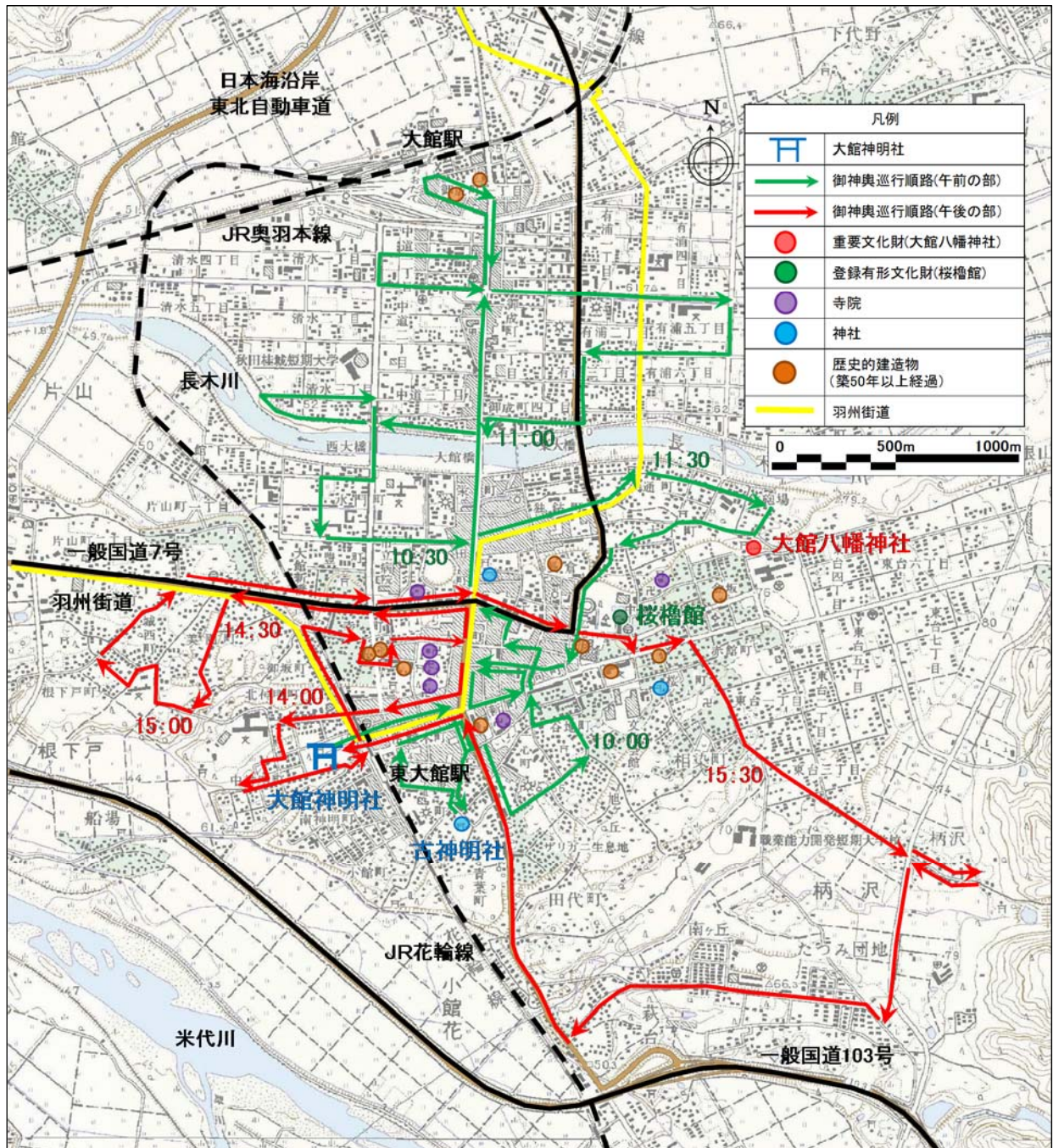
竹村家に残る城門(明治 2 年)

明治 2 年(1869)藩主の代理で佐竹義脩公が大館を巡視することになり、城跡に急きよ作った四つの門の一つである。後に竹村家が引き取り、一つだけ残っている。



佐竹西家累代の墓地(宗福寺境内)

宗福寺には、大館佐竹氏初代から第 23 代までが眠る墓がある。



御神輿巡行順路と町割りに残る建造物 (地図：出典国土地理院)

③大館神明社例祭の歴史

大館神明社が現在地に建立された当時の例祭は、旧暦7月末日から3日間であったと伝えられるが、明治3年(1870)の火災でそれ以前の記録が失われ、現在残っているのは、明治7年(1874)に御神輿が建造されて以降の記録のみである。その後の例祭は、明治42年(1909)に新暦9月14・15日に変わり、さらに翌年から明治天皇の御巡幸を記念して9月10・11日の開催となり、以降現在まで続いている。

明治期には、御神輿を先頭に背の高い鉾や飾山が続く長い行列が運行されてきたが、電柱や道路事情の変化により、運行が困難な時代を迎える。明治30年(1897)の記録に「大豊講の山車は田豊講へ行く途中、坂中にて電信へ横たわり」とあり、この頃から背の高い山車の運行には支障が出ていた(以下神輿は、大館神明社のものを「御神輿」、奉納講のものを「みこし」と表記)。



戦後の一時期、曳き手が足りず山車をトラックに載せて巡行した時代もあった(大豊講)

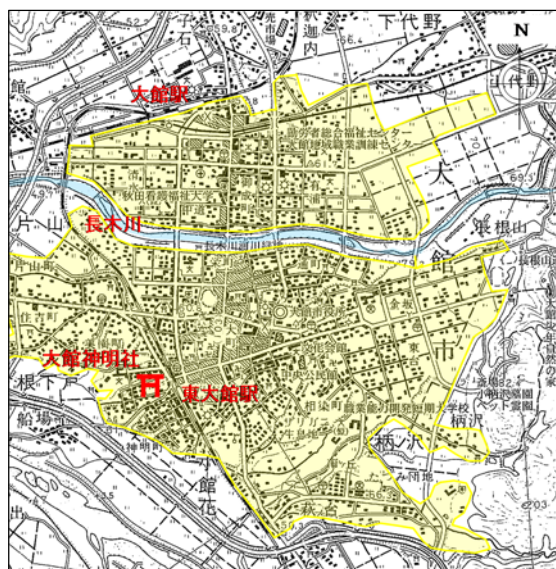
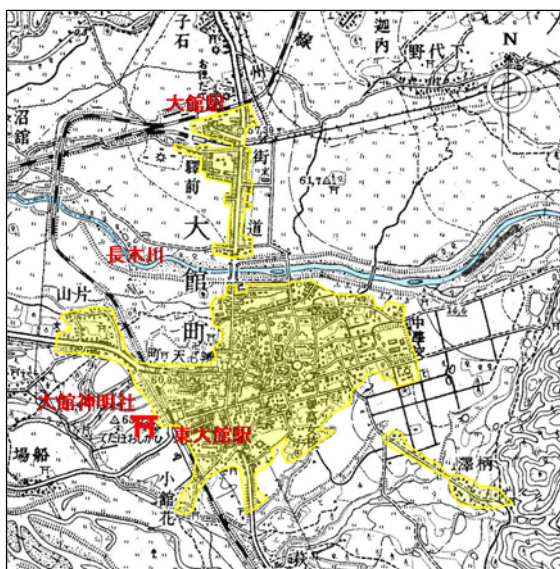
戦後になると氏子区域が広がり、奉納講の山車・みこしが増えたため、御神輿の巡行が渋滞を引き起こすようになった。また、大館神明社境内に奉納講全部を集めて神事を行うことが難しくなったため、昭和44年(1969)からは、奉納行事の奉告祭を別に開催するようになり、これ以降大館神明社の御神輿巡行と奉納山車・みこしの運行は別々に行われるようになった。

④氏子区域の広がりとお神輿巡行

旧藩時代から大館神明社の例祭は、外町4町と呼ばれる大町、馬喰町、中町、新町が年番制で取り仕切ってきた。これは、城下町に配置された町人町のうち大町を中心とした外町4町に資産家や大きな商人がたくさんいたということの表れである。商人たちの活動が活発になるとともに町が広がり、大館神明社の氏子区域も広がっていったのである。

明治後半からは、城下町の大半と長木川以南までが氏子区域に入り、その区域を御神輿や奉納山車が練り歩くようになるが、それでも氏子の主体は外町4町であった。大正7年(1918)の神社経費を見ると、総額六百五十八円三十六銭のうち85%を超える五百六十円二十七銭を外町4町で負担している。残りの15%を後に氏子として加わった11町内が負担していることから、外町4町の経済力が圧倒的に高かったことがわかる。

次頁の昭和22年(1947)の地図を見ると、長木川以南では城下町の範囲で町が形成されているが、長木川以北では駅前に向かう道路沿いのみで町が形成されていることが分かる。しかし、現在の長木川以南は住宅地がほとんどを占めるようになり、また長木川以北では農地が住宅地へと変化していることが確認できる。



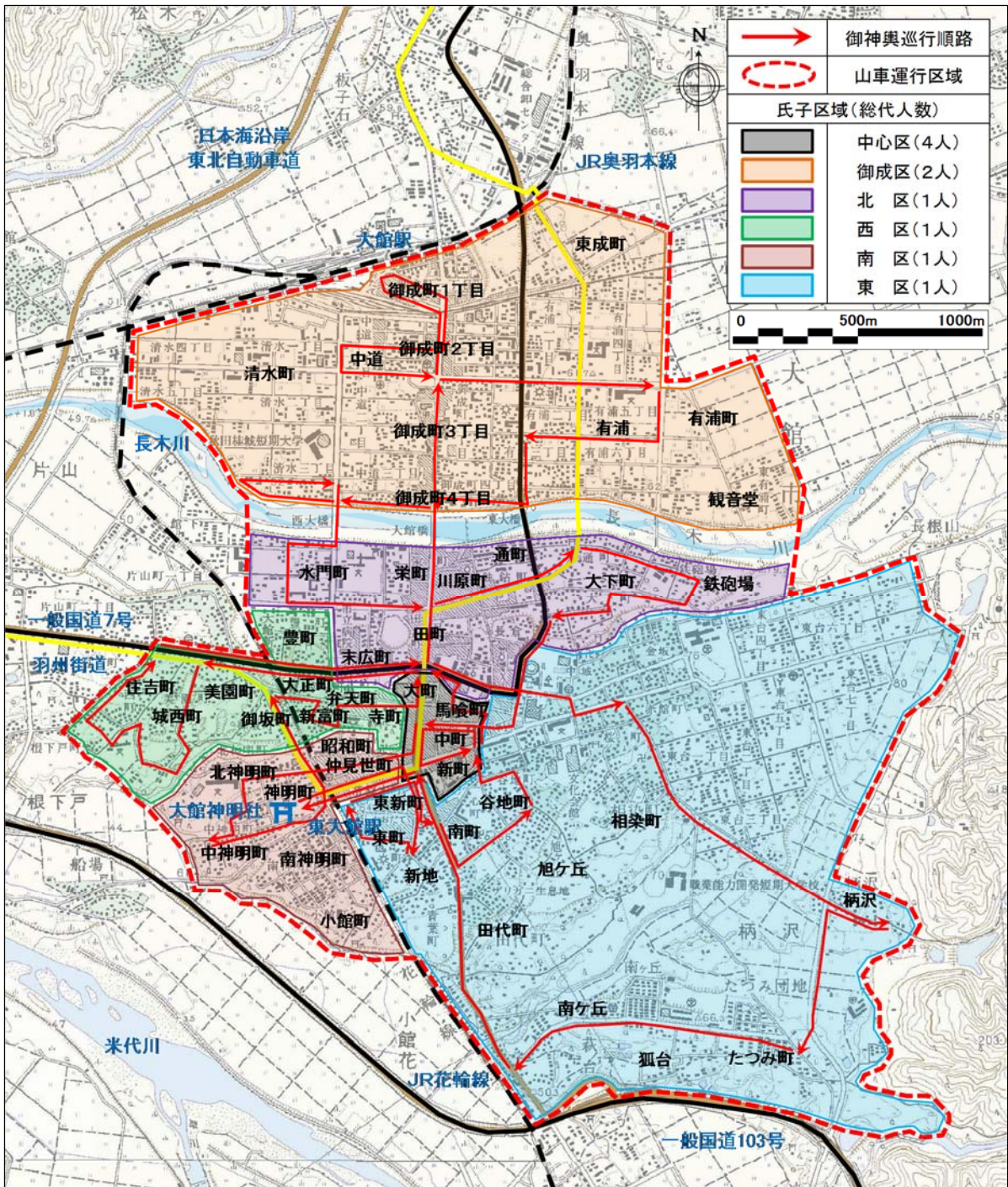
町の広がり(左：昭和22年、右：現在) (地図：出典国土地理院)

大館神明社の氏子町内もまた住宅地の拡大とともに広がりを見せ、昭和55年(1980)の御神輿は、栄町、御成町、中道、清水町、水門町、有浦、相染、たつみ町、南ヶ丘なども回るようになる。その後もいくつかの新興住宅街が氏子区域に加わり、御成区、北区、西区、南区、東区など(44町内)が現在の氏子区域になっている。外町4町から始まった大館神明社の例祭は、今では市街地のほとんどを氏子区域とするほど規模が拡大したが、今でも氏子の中心は外町4町である。そして御神輿巡行では、外町4町が年番で担当する御旅所(お昼の休憩所)や、御神体由来の古神明社と長倉町で執り行う神事が、昔と変わらない形で続けられている。

大館神明社氏子会の構成

(神明社)	宮司	(氏子会)	会長	1名	
	禰宜		副会長	2名	
			常任総代	10名	6ブロックの代表
			監事	3名	
			総代	(各町内の代表者)	
(氏子区域)	常任総代数	区域町内			
①中心区	4	大町、新町、馬喰町、中町			
②御成区	2	1丁目(1区~4区)~5丁目、清水町、中道町、有浦町、東成町			
③北区	1	栄町、田町、末広町、川原町、通町、大下町、鉄砲場、水門町			
④西区	1	弁天町、新富町、大正町、御坂町、住吉町、豊町、美園町			
⑤南区	1	神明町、南神明町、中神明町、北神明町、仲見世町、昭和町			
⑥東区	1	東新町、東町、新地、南町、田代町、柄沢、相染町			

※①がももとの氏子区域で、②~⑥はのちに広がった区域である。

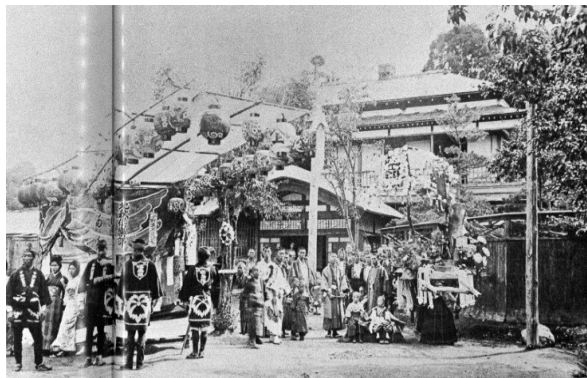


大館神社氏子の区域及び山車運行区域 (地図：出典国土地理院)

⑤山車・みこしを奉納する人々

かつての行列は、氏子が担ぐ大館神明社御神輿の後を外町4町内講中の山車、資産家の飾り山車と囃子山車などが続く賑々しいものであった。大豊講、中和講、馬龍講、新連講の4講は明治の頃から今も続く奉納講である。

その後、物資の乏しかった終戦後や度重なる火災を乗り越え、市街地の復興とともに大館神明社の例祭は続けられてきた。京都祇園山鉾のような背の高い姿を起源に持つ大館の山車は、都市化と道路事情に合わせる形で少しずつ変化してきた。現在の姿に定着したきっかけは、昭和50年(1975)に大豊講が建造した唐破風を四面に持つ神楽殿を模した曳き山車(人力)で、これ以降同じような形態の山車が次々に建造され、現在も運行している。昭和55年(1980)に運行された山車は14台、みこしは22台と記録されている(平成28年(2016)は山車14台、みこし8台)。この頃から、大館神明社例祭の神髓を損なうことなく、増えた奉納講が一体となった祭りを運営するために、氏子組織、奉納講が一体となった「実行委員会」を組織し、大館神明社境内に事務所を整え、一年を通じて取り組んでいる。



北秋倶楽部主人、石川重吉が奉納した余興山車
(大正時代)



馬龍講に集まった若衆(昭和2年)

⑥大館囃子(市指定無形民俗文化財)

大館囃子は、大館神明社例祭に奉納する山車の上で演奏されるお囃子として、長く親しまれてきた。

お囃子の音や調子を表現した古い記録は残っていないが、小野儀助日記には明治22年(1889)の例祭に「はやし」が奉納されたことが記されていることから、この頃には毎年恒例のお囃子が存在していたと考えられている。



大館ばやし保存会

また、明治 31 年(1898)に馬龍講が運行した背の高い山車の姿は、鉦を依り代とする京都祇園山鉦と近似性が高く、さらに大館囃子の曲調が花輪ばやし(重要無形民俗文化財)と近似性が高いことなどから、大館囃子は、「京都の祇園囃子」の系統と考えられている。



明治 31 年馬龍講の山車
(大館市史)

昭和 38 年(1963)に結成された大館ばやし保存会は、大館囃子をふるさと大館の民俗芸能として後世に伝えることを目的に活動を続け、「大館囃子」は平成 13 年(2001)に市の無形民俗文化財に指定されている。

例祭本番に向けての稽古は、修得が一番難しい笛が 5 月後半頃に、やや遅れて 7 月頃には太鼓や鉦かね、踊りが始まる。

8 月になると、囃子手たちの人数がそろい調子も上がり、お盆を過ぎると市内のあちらこちらから各講が奏でる大館囃子の音色が聞こえてくるようになる。保存会は、各講に大館囃子を正しく伝え、囃子手や踊り手を養成する役目も担っているのである。

大館ばやし保存会の構成

会長	1名	(笛)	師範	4名
			師範代	4名
副会長	3名	(太鼓)	師範	1名
			師範代	10名
監事	2名	(三味線)	師範	1名
			師範代	1名
		(鉦)	師範	1名
			師範代	1名
		(踊)	師範	1名

⑦余興奉納奉告祭(9月10日)

宵祭り神事の前には、余興奉納奉告祭の神事が馬喰町会場で行われる。

まずは大館神明社で遷御の儀を執り行い、神様を載せた御神輿が奉告祭の会場に向かう。会場に到着した御神輿の前に神主一行、例祭余興奉納実行委員会、奉納各講の関係者がそろって神事を執り行う。神事が終わると、各講にお神酒と御幣を授け、お祓いを受けた山車とみこしの正面右側に御幣を奉って、それぞれの区域へ運行を開始する。



奉告祭に集結する山車

奉告祭が行われる馬喰町の路地には、奉納講の山車やみこしが集結して御神輿の到着を待つ。



奉告祭の神事

大館神明社から到着した御神輿を前に、神主一行、山車・みこしを奉納する各講の関係者がそろって神事を行う。



稚児行列も参加

大館神明社でお祓いを受けたかわいい子供たちが、会場まで行列を作って参加する。



各講に御幣を授ける

神事を終えると、神様の依り代として、奉納各講に御幣を授ける。



各講の山車とみこしをお祓い

奉告祭に参加した全部の講の山車・みこしがお祓いを受ける。



依り代を山車に設置する

神事を終えると、各講の山車・みこしの正面右側に依り代の御幣を設置する。これで準備万端。



いよいよ出発

市内各地を練り歩く各講の山車・みこしが準備を整えて、それぞれ出発する。

⑧宵祭り(9月10日)

夕方になると大館神明社に氏子関係者、例祭余興奉納実行委員会、参加各講の代表が集合し、宵祭りの神事を執り行う。修祓しゅぼつに続いてご本殿の扉を開き供物を捧げ、斎主のりとが祝詞を奏上し、神楽を奉奏。氏子関係者が玉串を奉り、宵祭りの神事を終える。



しゅぼつ
修祓の儀

拝殿に向かう前に、清めの儀式を行う。



さんしん
参進の儀

神職を先導に祭主や関係者が、神事を行うため拝殿に向かう。



宵祭りの神事が始まる

本殿の扉が開き、厳かに宵祭りの神事が始まる。



けんせん
献饌の儀

御神前に供物を捧げる儀式を行う。



神楽を奉奏

巫女が浦安の舞を奉納する。



ほうてん
玉串奉奠

神官、氏子関係者、例祭余興奉納実行委員、各講代表などが玉串を奉奠する。



出陣式(奉納行事)

田乃坂越えを前に、各講の山車がそろい踏みで出陣式を行う。



田の坂越え(奉納行事)

大町会場の前に立ちはだかる上り坂を重さ1トンを超える山車が地響きをあげて駆け上がる見せ場。

⑨本祭り(9月11日)

○例祭と御神輿巡行

本祭りの朝は大館神明社の例祭から始まる。修祓しゅぼつに続いて齋主が祝詞を奏上し、神楽を奉奏。関係者が玉串を奉り神事を終えると、「遷御せんぎょ」の神事を行い、御神輿巡行の準備となる。

先代の御神輿は本殿とともに焼失したため、現在の御神輿は明治7年(1874)に造られたものである。昔は氏子たちが御神輿を担ぎ、神官が馬に乗り、牛が御神輿を載せた荷車を曳いた時代もあったが、現在は巡行の範囲が広くなり自動車の運行に変わっている。

明治20年(1887)の御神輿行列の様子は「1 榊さかき、2 御神旗ごしんき、3 かんこう鉾ほこ、4 猿田彦命さるたひこのみこと、5 御供おとも、6 祠掌ししょう、7 神官しんかん、8 御神輿おみこし、9 御神馬ごしんめ、10 唐櫃からひつ、その後ろに飾山が続く」となっていたが、現在は、1 先導車(先触れ)、2 指揮車(神官)、3 神輿車(御神輿、宮司、猿田彦)、4 供奉車(氏子総代)、5 初穂車という車列に変わっている。

古くからの習わしで古神明社と御神体所縁の長倉町(現在のグランドパークホテル)では神事を行い、外町4町(大町、中町、馬喰町、新町)の当番町が用意した御旅所がお昼の休憩所となる。御神輿巡行の車列は、大館城下のお寺や古くからの料亭街を通り、駅前方面や有浦・東台などの新興住宅地まで、広い氏子区域を隈なく回り、午後4時頃には大館神明社に帰還する。最後に「還御」の神事を執り行い、大館神明社例祭の日程を終える。



例祭の神事

関係者がお祓いを受け、例祭の神事が執り行われる。



遷御せんぎょの儀

御神輿の巡行を前に、神様にお遷りいただく儀式が行われる。



御神輿巡行が出発

大館神明社から5台の車列で御神輿の巡行がスタートする。



古神明社での神事

現在の大館神明社に古神明社の祭神が合祀されていることから、毎年神事が行われている。



長倉での神事

現在の大館神明社に合祀されている上平家(佐竹氏縁)の御神体にちなみ、毎年神事が行われる。



御旅所に神様を遷す

当番町が準備した御旅所に、御神輿の神様をお遷しする。



各講の会所を巡行する御神輿

御神輿は、丸一日かかって氏子区域各講の会所を巡行する。写真は新連講(新町)の会所の様子。



料亭街を通る御神輿

大正時代に建てられた建物が残る料亭街を通る御神輿。左奥は、割烹末広(昭和9年)。



御神輿に頭を下げる

奉納各講は、御神輿が通りかかると演奏や踊りを止め、被り物を取って頭を下げて見送る。



各講の山車が参拝

奉告祭の神事とは別に、各講の山車やみこしは、それぞれ大館神明社に参拝し、お祓いを受ける。



かんぎよ
還御の儀

氏子町内の巡行を終えて大館神明社に戻ると、御神輿から神様にお戻りいただく還御の儀式が行われる。



奉納講の大館囃子(奉納行事)

それぞれ運行する奉納講の山車では、大館囃子が演奏される。写真は南神講。



大館駅前の各講共演(奉納行事)

長木川以北の各講が大館駅前に集結し、大館囃子の共演を繰り広げる。



祭典祝い水(奉納行事)

祭りの終わりを惜しみ、締め込み姿の熱い祭り人達が周囲から盛大に祝い水を受ける。

(3) 大館アメッコ市



冬の大館に咲く枝アメの花

お正月が過ぎると、市内のあちらこちらで「枝アメ」が飾られ、冬の大館に華やかな風景が出現する。ミズキの枝に色とりどりの飴や短冊を飾る「枝アメ」は、雪の白や青空に映えて街路樹が花を咲かせたかのようなようである。

現在の大館アメッコ市は、毎年2月の第2土曜日とその翌日に、大町通りで開催されている。車両を通行止めにした大町通りには、特設の鳥居と拝殿が設置され、約100店のアメ屋などの露店が軒を連ねる。アメッコ市の飴を食べると風邪をひかないと言われており、縁起の良い飴を買い求めるお客様が県内外からたくさん訪れ、大町通りを埋め尽くす。



会場に作られた鳥居と拝殿



縁起の良い絡みアメをどうぞ

①大館アメッコ市の起源と「市」

大館アメッコ市は、400年以上前の天正年間(1573～1591)、大館城下に開かれた「市」で始まったと言われている。この頃は、いくつかの勢力が拮抗し、大館城の支配をめぐって激しく争っていた時代である。

のちに大館城下は佐竹西家の支配となり、城代が管理する「市」が各地に開かれるようになり、開催日や売買商品の制限なども決められた。城下町が形成されると、大町を含む外町4町が商業地域として賑わうようになる。

大館市史によると、明治初期から明治30年代まで大館地方で開かれる市は、7の日が大館、6の日が十二所、2の日が川口、5と10の日が扇田、4の日が早口と決められていた。このうち大館町の市は、大町、馬喰町、中町、新町の四つの市が、月の7・17・27の日に順繰りに開かれ、大町の市は、小野家(当時の主人は小野儀助^{ぎすけ})の前通りで開かれていた。

こうした市で売られていた初めの頃の飴は、農家が米などで作ったものと考えられている。昔のアメの製法(むつ市史・食の事典参照)を紐解くと、もち米や大麦もやしを用い、乾燥や発酵を経て水飴状にする。お菓子というよりも、甘味料や薬のような使い方をしたようである。

明治期の小野儀助日記には「あめ町」が登場し、これが最も古いアメッコ市の記録である。

昭和の初め頃になると、お菓子屋さん^{お菓子屋さん}が商売として飴を作るようになり、寺町の小路で「市」として開かれるようになり、これが現在の大館アメッコ市につながるものと考えられている。

昭和14年(1939)発行の浅野泰助^{たいすけ}著「秋田奇聞抄」には、「明治に入ると中央から製菓技術を教える渡り職人がみられ、飴の加工技術が一段と進歩した。着色、動物や果物の型づくりなどが多くなり、女、子供達の購買意欲を駆り立てた」とあり、その頃は周辺の農家や季節営業、兼業、副業の飴売り業者が主流を占めていた。これらのことから、少なくとも明治期に開かれていた「市」にはアメが売られていて、昭和の初め頃から現在のような「アメッコ市」が開かれるようになったと考えられる。

言い伝えには、(アメッコ市の)「飴を食べないと蛆^{うじ}になる」とあるが、この意味は定かではない。今は開かれなくなってしまったが、昔は岩手県の浄法寺^{じょうぼうじ}や住田町^{すみた}などでも「飴っこ市」が開かれており、その地方にも「この日飴を食べないと蛆になる」という言い伝えがある。



花が咲いたような枝アメ



秋田犬のパレードも行われる



たくさんの枝アメが並ぶ(昭和40年代)

②アメッコ市のシンボル「枝アメ」

大館菓業百年祭記念誌(昭和60年(1985))によると、枝アメは、餅を細い木の枝に付けて神棚などに供える「餅花」をヒントにして作られたもので、昭和20年代半ばに登場したといわれる。

地元紙「北鹿新聞」^{ほくろく}には、昭和20年代からアメッコ市の記事や広告が掲載されており、昭和26年(1951)頃から「飴の木」「芝の枝に赤い飴」「南天の赤い実」という表現が登場する。これが現在の枝アメにつながっているものと考えられる。枝アメは、この頃からアメッコ市の人気商品で、大人も子供も枝に付いたアメを手にとり下げて歩いていたようである。当時は木の種類にも決まりはなく、飾りつけもシンプルであったが、昭和50年代に入るとミズキの枝を使った枝アメが定着し、市内のあちこちに飾りつけられた枝アメはアメッコ市のシンボルに定着したのである。

③アメッコ市に関連する建造物

現在アメッコ市の主会場となっている大町通りは、羽州街道の一部であり、大館城下の外町4町に位置する。羽州街道の裏通りには蓮荘寺・浄応寺・玉林寺が並び寺道通り^{てらみち}と呼ばれていた。この場所には古くから小さな市が立ち並び、この中でアメッコ市が続けられてきたと考えられる。三つの寺は現在も同じ場所にあり、この通りは現在寺町通り^{てらまち}と呼ばれている。



蓮荘寺(寺町通り)

小場義成が大館城代となった後に常陸太田から移転。戊辰戦争で焼失し、明治11年(1878)の再建である。



浄応寺(寺町通り)

浅利残党を説得し、小場義成を無血入城させた功によりこの地を与えられた。明治20年(1887)頃の再建である。



玉林寺(寺町通り)

大館地方の領主、浅利則頼が鳳凰山の麓に創建と伝えられる。十狐城下に移転後、現在地に移ったが、火災で類焼し、昭和6年(1931)に造営。



昭和37年当時のアメッコ市(寺道通り)

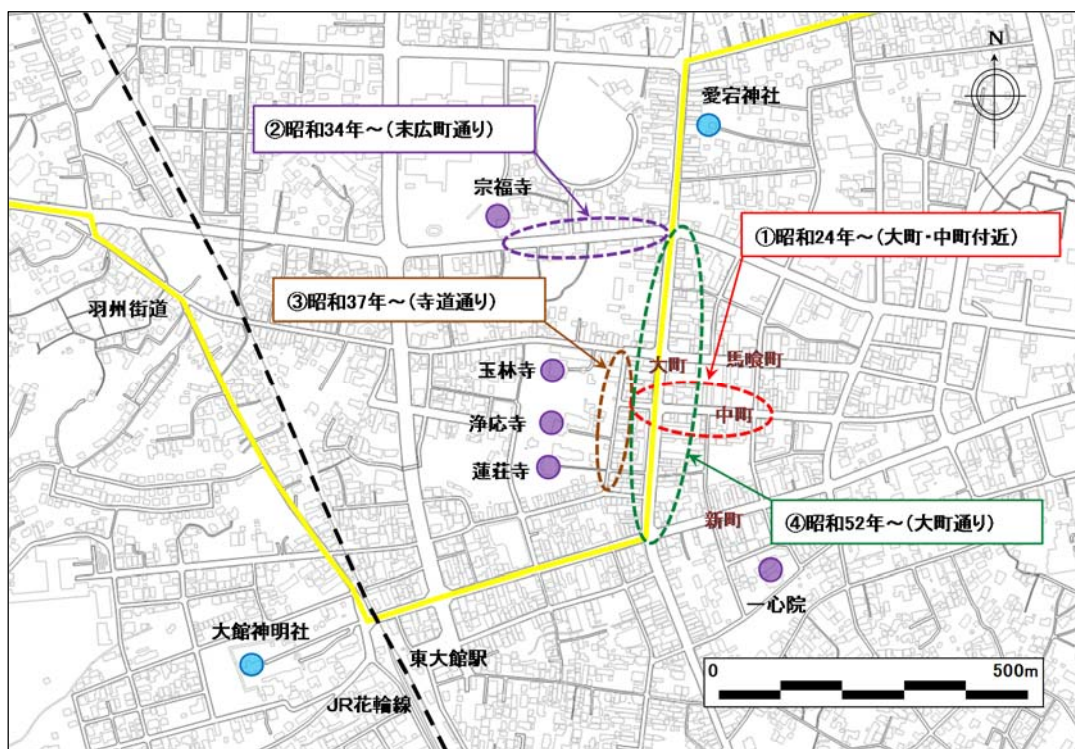
蓮荘寺、浄応寺、玉林寺が並ぶ寺道通りでは、昭和37年(1962)から昭和51年(1976)頃までアメッコ市が開かれた。

④アメッコ市の変遷

地元紙の記録によると、アメッコ市の開催場所は、昭和24年(1949)からは大町・中町付近、昭和34年(1959)からは宗福寺に続く末広町の通り、昭和37年(1962)から昭和51年(1976)頃までは蓮荘寺・浄応寺・玉林寺が並ぶ寺道通り、昭和52年(1977)からは再び大町通りで開催されてきた。特にお寺の界隈には、古い時代から小さな市が開かれてきたので、後の時代になってもアメッコ市の場所として定着するようになったのであろう。

戦後の物資が乏しい時代に、アメは高い買い物であったが、地元紙の記事は人々がこぞってアメッコ市のアメを買い求める様子を伝えている。だんだんと干支や果物、動物を模ったアメ、芸術品のようなアメなども登場するが、やがていつでもどこでもアメが手に入るようになると、アメッコ市は低迷の時代を迎える。

大きな変化を迎えたのは昭和57年(1982)に大町通りを歩行者天国にして開催するようになったことで、全国各地から観光客が訪れる大規模なイベントになった。いつしか「飴を食べないと蛆になる」という言い伝えは、「飴を食べると風邪をひかない」に変わり、今でも大館アメッコ市には、たくさんの人々が訪れる。



アメッコ市の開催場所の変遷 (地図：出典国土地理院)

(4) まとめ

大館の中心部には、かつて大館佐竹氏の町割りによりつくられた城下町があった。

大館神明社の例祭は、収穫を終えて周辺の農村集落から人々が城下町に集まり、町を形成・発展してきたことを背景にもち、地域の一体性を強める秋祭りとして続けられてきた。同時に外町4町の商人たちにとって例祭は、町に周囲からたくさんの人々を呼び集めることができる大切な事業であった。そのため商人たちは氏子として大館神明社を守り、例祭を率先して盛り上げてきたのである。

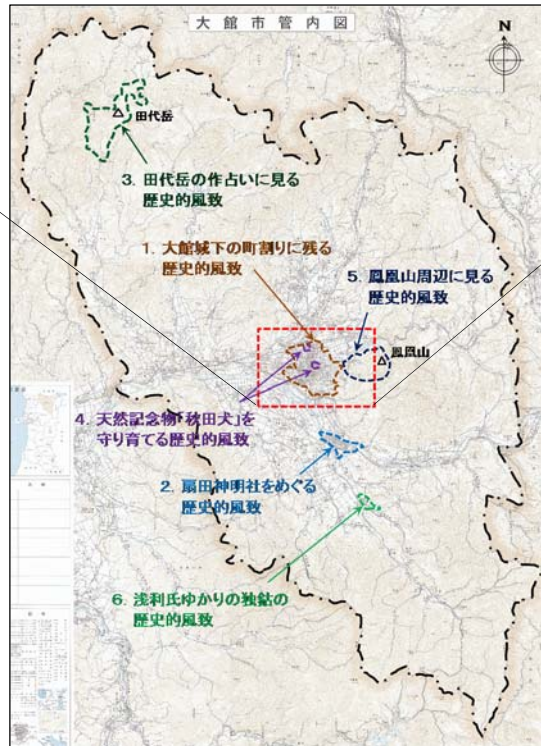
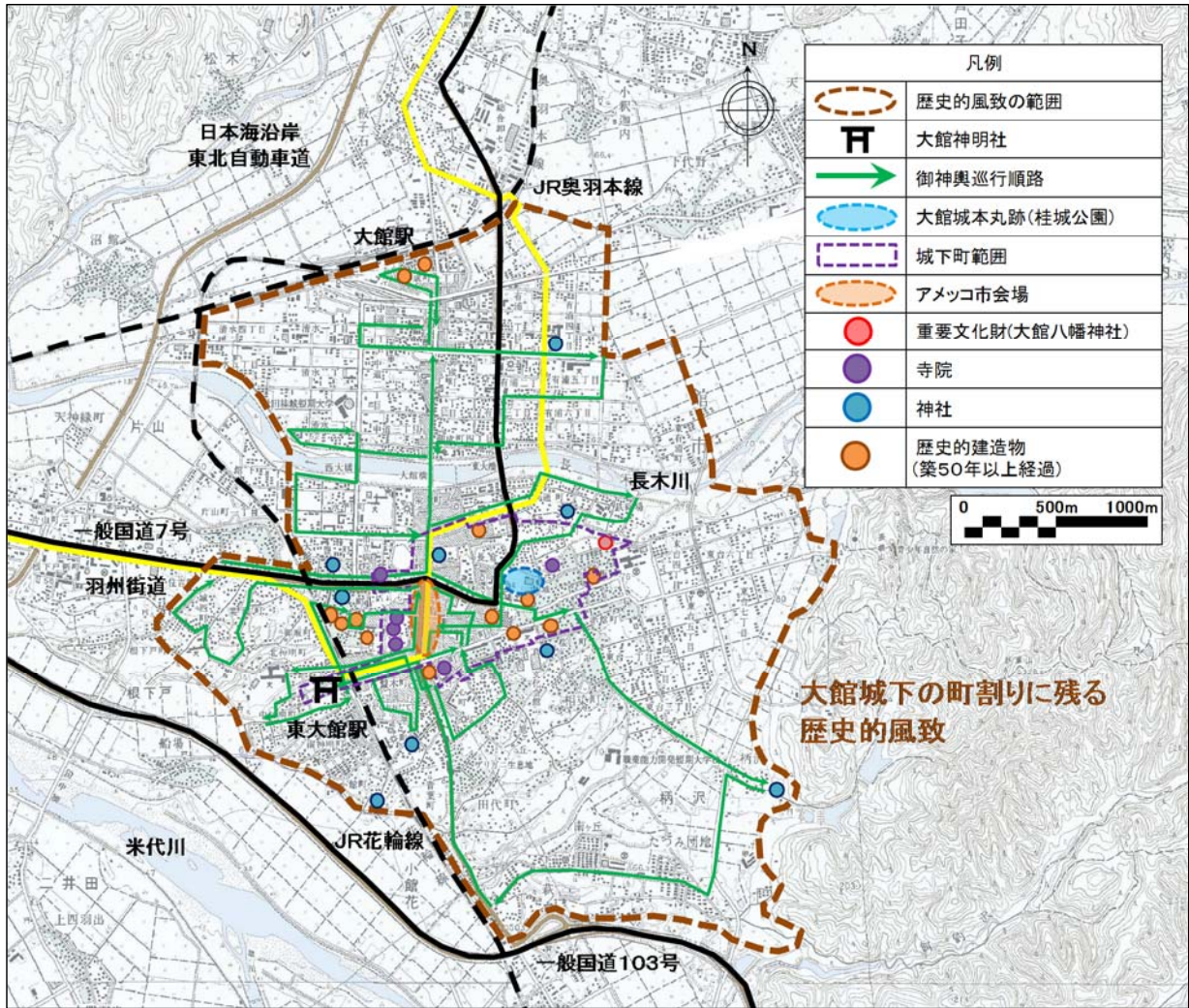
その後、大館は度重なる火災に遭いながら、何度も復興を重ねて、まちづくりの歩みを進めてきた。大館神明社の例祭は、先人たちが積み重ねてきた歴史や情熱を込めて次世代へと伝えられ、毎年「祭り」の賑わいを高める努力が続けられている。

大館佐竹氏の城下町を舞台に始まった祭りは、かつて賑わった新開地しんかいちの料亭や大館駅前の映画館など、近現代の建造物が残る地域まで御神輿や曳山車が運行するようになり、広い市街地で例祭の行事が繰り広げられるようになった。

今もお盆過ぎになると、市内のあちらこちらから大館囃子の音色が聞こえ始め、お祭りには自分の所属する奉納講の山車を曳くために帰郷する人々がいる。

大館アメッコ市もまた、城下町の小道に人々が品物を持ち寄って開いた小さな市に生まれ、冬の大館に鮮やかな飴の花を咲かせる冬祭りへとつないできた文化である。今も市の周辺には、蓮荘寺・浄応寺・玉林寺が並び、市と一体となり風情を醸かもし出している。今は大通りが会場となり、規模が大きくなったアメッコ市は、ふるさと大館の代表的な冬祭りである。

小さな市から始まった商業文化の源流は、やがて城下町にたくさんの人々が集まる町を形成し、現在の大館市の基礎を作った。大館神明社の例祭と寺町周辺の大館アメッコ市は、多くの市民の手で受け継がれ、大館城下の市街地に良好な歴史的風致を形成している。



大館城下の町割りに残る歴史的風致の範囲 (地図: 出典国土地理院)

【コラム】

○大館城の守護神から現在の大館八幡神社へ

大館八幡神社には、国の重要文化財に指定されている本殿2社(正八幡宮・若宮八幡宮)がある。初代大館城代小場義成が大館城の守護神として城内に祀っていたもので、貞享4年(1687)第4代佐竹義武が、大館城及び大館鎮守総社として、現在地に建立したものである。

明治期になると大館城代は秋田市に転出し、政府の神仏分離令により大館八幡神社もその形態を変え、内町16町内の氏子が大館八幡神社を運営してきた。大館城の守護神として祀られていた当時の神事や行事に関する資料は残されていない。

現在の大館八幡神社は、かつての氏子町内にこだわることなく多くの崇敬者の支えで運営され続けているが、かつて城主であった大館佐竹氏との交流は続いている。

写真は、平成14年(2002)に行った鳥居と参道の渡り初めである。神主に続くのは佐竹西家第24代当主の代行で出席した次期当主である。参列者は、佐竹氏の家紋と同じ扇の社紋を染め抜いたはんてんを着用し、神事が行われた。佐竹西家当主が大館八幡神社を訪れる機会が数年に一度はあるという。



大館八幡神社の渡り初め

○八幡会の「節分豆まき行事」

「大館八幡会」では、大館佐竹氏の家紋入りの陣笠と袴のいでたちで行う節分豆まき行事を恒例の年中行事として続けている。もともとは明治44年(1911)亥年生まれの有志が、大館城のお侍たちが節分に行っていたと思われる豆まきを再現しようと、昭和50年(1975)から始めたもので(お祓いをした「福豆」をまくので)掛け声は「福は内」のみである。

いつの頃からか、豆まきには戌年・猪年の厄年42歳の代表者が参加するようになり、今では生まれ年に関係なく厄年42歳の年男が大館八幡会とともに豆まきを行うようになった。

最近では300kgの落花生を用意し、「家内安全」「交通安全」「防災除」と書いた祈願札を入れて3万袋の「福豆」を作る。大館城ゆかりの大館八幡神社から、陣笠に袴姿の一行が「福豆」を届けるとあって、「福は内」の幟を持って歩く一行には、たくさんの市民が「福豆」を求めて集まる。



大館八幡神社の節分豆まき



福豆の袋詰め作業